

材料・界面部会 部会行事

第九回日韓材料・界面シンポジウム (9th Korea-Japan Symposium on Materials & Interfaces)

参加報告

記録者 福島高専・車田研一

2010年10月31日(日)から11月3日(水)の4日間、大韓民国全羅南道麗水市の南東海岸に位置するThe Ocean Resortで第九回日韓材料・界面シンポジウム(9th Korea-Japan Symposium on Materials & Interfaces)が開催された。この国際会議は韓国と日本の交互もちまわりで隔年開催されており、今回は前回第八回開催地の札幌から麗水へバトンが渡されたということになる。今回はKICHe Honam(湖南) Leading Industry Officeがホストとなり、Hanwha(韓華) Chemical社をはじめとする多くの支援団体の分厚い援助をとりつけ、賑々しく会議を開催していただいた。韓国側実行委員会の尽力に深謝する。なお、本会議は材料・界面部会の基幹的な部会行事として位置づけられており、ケミカルエンジニアリング分野での日韓学術交流の一翼をになうミーティング型イベントである。

全羅南道東部(対馬海峡北岸)に位置する麗水(여수)^{ヨス}はソウルや釜山といった国際空港がある拠点都市と比較すると日本からの旅行所要時間がかかなり長いため、第一日の10月31日と最終日の11月3日は実質的には移動・集合のための時間的なバッファとして機能した。そのため、10月31日の18時から韓国側実行委員の企画による現地での歓迎会が催されたが、それには間にあうことができなかった参加者も少なからずいた。明るく11月1日朝より基本的には添付のプログラムどおりにアカデミック・セッションが開催された。劈頭の嶺南大学校・金教授の司会による浦項工科大学・李教授の電気化学的孔構造測定に関する40分間の基調講演が行われたのち、発表会場は二手にわかれ、並行して一度に二件の口頭発表が進んだ。午前中の最後に日本からの招待講演二件(北海道大学・向井教授『氷晶テンプレートリング法』、九州工業大学・山村准教授『ソフト界面によるtunable乾燥技術』)が並行して行われた。昼食は韓国側実行委員会のきめ細かい心づくしによる隣室でのチゲ鍋会食であり、日の高いうちではあるが和やかに懇親が進んだ。

午後はおもともとプログラム上は11月2日に予定されていたポスターセッションと二室並行口頭発表などが進められ、最後は京都大学定年後に同志社大学・富士化学(株)で単身精力的に研究を続けておられる足立基齋先生がアンカー講演だった。色素増感太陽電池材料の近年のセンセーショナルな研究報告群を俯瞰する先生御自身の講演はいつものとおり精力的で、非常に始原的な琴線を刺戟されるように感じていたのは筆者のみではあるまい。その後、同じフロアで参加者全員による夕食会が開催され、たいへん盛会であった。筆者も同卓の韓国の若手スタッフ連と様々に会話が進み、貴重な交流を持つことができた。

翌日はチャーターしていただいたバスに乗り込み、近隣のHanwha(韓華) Chemical社の広大な事業所の見学会が午前中に行われた。半韓半和スタイルの昼食ののち、万博会場となる麗水の海岸近辺及び旧市街

の高台の旧蹟を案内していただいた。そののち、韓国側 VIP に日本からの参加者を接待していただくかたちで懇親会が開催され、上座におられた迫原部会長には部会代表および日本側参加者の代表としての韓国側実行委員会への謝辞をいただいた。さらに宿舎そばで日韓両サイドの実行委員メンバーが二次会をもった。ここでは韓国焼酎の強烈な酒精の威力もあって大いに懇親が進み、日韓両実行委員会メンバー同士で今後の再会を祈願した。(これは蛇足であるが、私は別れ際に韓国側のメンバー(←男性)に hug されて少し、否、かなり驚いたのだが、皆さんも御同様だったのだろうか。)その後宿舎へ戻ると既に日がかわっていた。筆者は翌日は(とてもいたい頭をかかえて宿酔に天を仰ぎながら)午前五時に宿舎を出発し、麗水発の釜山行き高速バスで釜山へ向かい、金梅国際空港発成田空港行きの便で帰国した。筆者の場合、成田空港からの国内移動に概ね 5 時間かかるという事情もあり、飛行時間はわずかに 2 時間足らずながら帰宅したのは麗水を出発した出発約 18 時間後だった。

おそらく本学会は交流学会としての色彩を当初から継続的に有しており、その意味で今回の会は十全に目的を果たしていると考え。元来、「材料」分野で特段の絞込みコンセプトなく広めのスペクトルで研究集会を開催すれば自ずとその雰囲気はアモルフなものになるだろう。今回の研究発表プログラム(添付)に関し、なにか全体的な傾向や動向・趨勢を指摘しようとするに特段の意味があるとはまったく思わない。ただ、これはなにか筆者の個人的趣向に近いものであるが、敢えてトレンドをよもうとすることを止めて研究すべき問題を研究する者自身が自らの胸腔へ問うてみることも重要であろうと感じた。これはむろん自戒の念を込めてのことである。

1990 年代後半から「材料」あるいはその辺縁語(マテリアル、など)が研究分野としてプレゼンスを増してきたのは明らかである。材料自身はいつの世も無限の種類あるわけであり、その意味で材料研究自体は無限の novelty を常に示してもおかしくはないはずなのだが、研究集会等に出ると多くの場合研究の雰囲気や道程における path のとりかたが極端に画一化していることに気づかされることが多い。本来それは不特定多数の「研究する者」らが一堂に会して相互刺戟をすることが目的のはずの研究集会にとって望ましいことではないはずだ。これは「他の人へ自分の研究を話す」側、「他の人の研究の話を受け止める」側、双方の研究の水際に際しての視座の問題である。もとより他の人へ干渉すべきことがらではないが、悔いの残らない問題設定をしたいところだ。そういえば、麗水の沿岸を遊覧する船の中で猛烈にエネルギーな太鼓を打ちながらエンドレスに踊り続ける御婦人の旅行団が強烈に印象に残った人は多いと思う。生きているというのはまさにあのことだ。生きてもわずか百年足らず、悔いなく仕事をするためには、エネルギーを惜しまず出しつくさなくてはならない。理由なくそれを強く感じた。

次回の本シンポは 2012 年に日本国内で開催される予定である。日本国内での今後の開催にあたって開催スタイルや時期など懸案事項がまさに山積である。ケミカルエンジニアリング分野での日韓交流の嚆矢的イベントなので漸次横展開をねらいながら継続させていくことが望ましいという見解もきいている。将来を念頭に入れたサステイナブルな開催形態を真剣に議論すべき段階に差し掛かっている。

2010/12/07 記 車田研一（材料・界面部会 広報担当）